

東方朧夢翔

Hiromi

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

至って普通の男子高校生が異世界へ送り出される物語。

邂逅

目次

1

## 邂逅

満月が霞んで見える夜。何も考えず夜道を一人で歩いていく。

結城 和馬 17歳。高3。

「ただいま。」

自宅へ帰り一言残すと、すぐに母の返事を聞き、すつと部屋へ入って行った。

特に変わったことのない、普通の毎日を過ごしていた。

翌日、またいつもとおなじ日常が迎える。

・・・しかし、今夜は違った。

帰り道、突然周囲を暗闇が包む。暗黒の奥からは、一人の女性。

「んん、もうすこし強そうな子がいいのだけれど、この際贅沢はなしか。」

「・・・!?!」

驚きと恐怖で言葉が出なかった。

「ねえ君、今の生活に満足してる?」

「え、えつと、..。」

「ごめんなさいね。変な質問しちやって。」

とりあえず落ち着こう。目を閉じて。深呼吸。深呼吸。目を開いて。

「えーと、どなたですか?」

「私? 私は八雲紫。君のことは聞かないでも分かるわ。和馬君。」

「で、何の用ですか? この暗いのはあなたがやったものでしょう? 早くやめてくれませんか?」

厄介事の予感しかない。とりあえず早く帰りたい。

「君に話があるの。ちよつと手伝ってほしくて。」

面倒事確定コースキマシタワー・・・。

「・・・」応聞いておきます。何をすればいいんですか?」

「一緒に異世界へ行つて、私の下で働いてほしいの。」

「嫌です。」

話を遮るように断った。冗談じゃない。

「ふーん。そう。じきに君から行きたくなくなるから問題ないわ。」  
いやいや。ないから。

彼女は放った暗闇をしまい、暗闇とともに姿を消した。  
今起きたちよつとおかしな体験を思い返ししながら、帰り道を急いだ。

「ただいま。」

自宅へ着くと、いつもの一言。しかし返事がない。

出かけているのかな。しかしリビングの電気はついている。テレビの音も聞こえる。

部屋の扉をあけると、母がいた。いつも通り椅子に座ってテレビを見ていた。

「ただいま。」

返事はなかった。

「母さん？母さん？」

やはり返事はない。

なんだろう。この自分の心を握られているかのような緊張感は。どれだけ声をかけてもダメだった。

いよいよ肩を掴もうとする。

自分の腕は母の肩を貫通した。まるで透明人間。辛すぎる現実にしばらく動けないでいた。

飯の時間がやってきた。妹が二階から下りてき、席に着く。

椅子が一つ減っている。箸も、茶碗も、あるはずのものがない。

まるで、最初から和馬という人間がいなかったかのような。

ありえない現実に涙を流し、家を出た。

走った。とにかく走った。原因の元であろうあの場所へ。

「おいーどこだアーどこにいるんだア!!!」

精一杯の声で叫んだ。叫び続けていると、彼女はすぐに姿を現した。

「あら〜？どうしたの？そんな疲れた顔して。」

「お前……。俺に何したんだよ！」

「それは君もわかってるでしよう？」

怒りと辛さでどうにかなりそうだった。我慢が限界に達した。ついに拳を向け、殴りかかった。

しかし、謎の力に跳ね返された。何度立ち向かっても無駄だった。

「君にもう一度問う。今の生活に満足してる？」

「してねえよ。アンタのせいだな。」

「私なら君を、今より幸せにできるわよ？　私の頼み、聞いてくれる？」

もう諦めた。

「……。わかったよ。アンタの頼み聞いてやるよ。」

紫は静かに微笑んだ。

「ふふ、ありがとう。さっそくだけど、君は私と契約を結ぶの。」

「……。契約？」

「式神の契約。君には異世界で私の式として働いてもらうの。」

式神。多分、部下ってことだよな。

紫から折り紙くらいの紙とナイフを渡された。

「君の血で名前をカタカナで書いて。痛みはないから安心して。」

右手の指に小さな傷をつけ、血を出した。が、名前が思い出せない。

「な、なんで？　名前がわからない。」

「それもそのはず。私が名前を奪った。だから周囲から認識されなくなったのよ。」

理屈はどうであれ、やっぱりコイツの仕業か。

「名前を戻してあげてもいいけど、せつかくだし私が新しい名をあげる。」

いや、返してよ。と突っ込む間もなく考え始める。

「そうねえ、あなたと初めてあった時は月が霞んで見えてたわねえ。」

そういえばそうだった。

「虚。今からあなたの名前は虚よ。朧月を見てる君は、虚ろな目をしていたから。」

「虚……。」

紙に ウツロ と血で記し、紙を渡した。

「あなたは私に血で約束を渡した。私もあなたに、異世界渡航の許可と最低限の生活保障を約束してあげる。」

儀式を行うから少し下がりなさいと指示を受け。後ろに下がった。

「賢者 八雲紫の名のもとに、血の主を式神とする。幻想の都へと誘おう。」

眩い光が放たれ、虚の左手に集約した。そして掌に刻まれる、虚の文字。

「これで終わり。よろしくね。」

微笑みを見せると、右手を上げ、ゆっくり闇を戻していく。

彼女の横に、金髪の幼い少女がいるのが見えた。

そうして意識は途絶えた。